

# 歌物語における東国

## 三角 一

### 一 はじめに

当初の私のもくろみでは、一〇〜一一世紀あたりの王朝期の早い時期における対東国意識をさぐるには、歌物語の『伊勢物語』『大和物語』などがあり、一二〜一三世紀のそれを考察するには、新しく作られた歌語りの集成である『古本説話集』上巻があるので、その間、約三〇〇年間にわたるながしかの時代的な変容が観察されればおもしろいし、また補助資料として説話集の『今昔物語集』『宇治拾遺物語』もあるので、さまざまな問題を掘り起こすことができるとも思われる。と考えたのであった。

シンポジウムの講師をお引き受けして、ほとんど零からの勉強であったため、たいしてお役に立てなかつたというのが率直な気持ちで、執筆にも十分な時間をかけることが

できなかつたのであるが、それなりに参考になりそうな事例をいくつか集めているので、お目通しいただければ幸いです。

### 二 都鄙の問題と東国

やはり、まず都鄙の問題について粗あら見えていくことから始めよう。地方には豪族がいて、大領・郡領であったり、広く在庁官人をつとめたり、また中央から派遣されてそのまま土着する者もいた。『うつほ物語』吹上上巻の紀伊国の豪族神奈備種松は、「名ある限りは仏師をはじめて、鋳物師、絵師、作物所の人、金銀の鍛冶などを、所々多く据ゑるなど豪勢な生活をしていて、孫の涼には「都のもの師といふ限りは迎へ取りつつ、かれが才をば習ひ取」らせたという。また、『源氏物語』明石巻に播磨守をつとめ

て土着した明石入道の暮らしぶりが具体的に描かれるが、若紫巻では噂話として、明石の君の「母こそゆゑあるべけれ。よき若人、童など、都のやむごとなき所どころより類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」といわれている。いわんとするところは、はたしてそうなりうるものかどうか、明石の君の趣味・教養と育ちは都人に変わらないというのであろう。

芥川龍之介『芋粥』の原作として知られる『今昔物語集』巻二六第17話「利仁將軍若き時、京より敦賀に五位を將て行く語」は、越前国の勢徳の者の婿であったのちの鎮守府將軍藤原利仁が、芋粥を飽きるほど食べたいという五位の侍の夢を（無惨にも）かなえてやった話である。この説話と神奈備種松邸の描写を元に、初期地方武士団の生活と機構を描写しているのが石井進『日本史の社会集団・3・中世武士団』（小学館、文庫版、平成12年）である。参照されたい。

地方豪族のもとで使役させられていた者の多くは在郷・近郷の者であつたろうが、また特殊技能なり趣味・教養のよさなりを發揮する都人も少なからずいたらしい。種松邸にも明石の入道のもとにも、職能者や学問・芸道の物の師、若人の女房や女の童が京から迎えられていたという。これらの者たちは地方に定住するとは限らず、むしろ都鄙の間

を往来して、文化や富の移動をはかっていたと見たほうがよいのではないか。

そのほか、『伊勢物語』第六二段に、「はかなき人の言につきて、人の国なる人につかはれて」いる女がいて、『今昔物語集』巻三〇第4話の類話によれば、込み入った事情が説明されており、『宇治拾遺物語』第93話「播磨守為家の侍佐多の事」には、「京よりうかれて、人にすかされて来たりける女房」がいたという。これを積極的に解するならば、地方に行けば都人ということで職にありつけるかもしれない、なおいえば、『狭衣物語』巻一の飛鳥井の女君の乳母の頭をかすめる、「年老いにてはべれば：東の方へ人の誘ふにやまかりなまし」、「陸奥国の將軍（佐官とも）といふ者の訪るるを、さてや往なましと思ふなりけり」という企ても、老いを養うためのひとつのプランであつたことと思われる。彼女たちの内面に立ち入ったり、都人一般の声に耳を傾けたりする余裕はないが、のちに言及することがあるかもしれない。

次に、地方の豪族の子が上京したついでに、都人を妻として国に伴うとか、受領の子が都人を妻として任地に下向するとかいうことがあつた。京の雅びを身につけているとか、血筋・家柄のよさとかいった点で、地方の豪族の子息たちにとつて都人を妻にすることが地方における自己のス

テータスにもかかわったからであろうか。また、都鄙の間を往来し、中央貴族に奉仕する受領の子にとつては、妻には任地の地元の女性ではなく、都人が求められたのであらう。

前者の参考例としては、『伊勢物語』第六〇段の「まめに思はむといふ人につきて、人の国へ」行き、「ある国の祇承の官人の妻」になつた女、『大和物語』第五七段の「とかくはふれて、人の国に、はかなき所に住」んでいる平中興の女を平兼盛が見舞つた話、『源氏物語』玉鬘巻の肥後の大夫の監が強引に玉鬘に求婚する話などがある。

後者の参考例としては、『落窪物語』巻四の帥の中納言と四の君のあわただしい再婚、『源氏物語』夕顔巻の夕顔の失踪をいぶかしんだ身内の者たちが「もし受領の子のすきずきしきが…やがて率て下りけるにや」と考えたこと、同・蓬生巻の大式の甥が末摘花の乳母子侍従を伴うこと、『狭衣物語』巻一の大式の子の道成が飛鳥井の女君の乳母の一存で女君を同道すること、『今昔物語集』巻一六第九話「女人、清水の観音に仕まつりて、利益を蒙ぶれる語」の陸奥守の子の嫁になる話など、挙例には事欠かない。以上、見てきた中にはいくつか東国がらみの例もあるが、いまはとりあえずここまでを予備的考察としておこう。

### 三 『古本説話集』上巻の東国話

さて、『古本説話集』二巻は鎌倉初期の成立と考えられており、上巻は王朝期を回顧する新たな作られた歌語りの集成で、下巻は寺社縁起や仏教説話の集成で、どちらも当初から絵を伴うことが考慮されていたのではないか、というのが私の臆測である。上巻は全四六話からなり、そのうち五話が東国にかかわっている。その排列を見ると、

×第一九話 平中が事

○第二〇話 伯の母の事(常陸国が舞台)

△第二一話 伯の母の仏事の事

○第二二話 貫之が事(東人の真似)

○第二三話 躬恒が事(東人の真似)

△第二四話 蟬丸が事(逢坂の関に住む)

△第二七話 河原院の事(陸奥の塩竈を模す)

○第二八話 曲殿姫君事

(陸奥国に下向、常陸国にも住む)

×第二九話 伊勢の御息所の事

△第四〇話 高忠が侍の事(越前国が舞台)

△第四一話 貫之が土佐の任に赴く事

(土佐国からの帰洛)

×第四二話 大齋院…、第四三話 大齋院…

△第四四話 大隅守の事(大隅国)

△第四五話 安倍中磨が事(唐土)

○第四六話 小野宮殿の事(陸奥国より消息)

と、連想が途切れて前(ないし後)と繋がらない箇所(×印)、連想で繋がる箇所(△印)があり、○印が東国に關連する話である。第二二〜二三話は、

今は昔、東人の、歌いみじう好み詠みけるが、螢を見て、

あな照りや虫のしや尻に火のつきて小人魂とも見えわたるかな

東人の様に詠まむとて、まことには貫之が詠みたりけるとぞ。(第二二話)

今は昔、躬恒がもとへ、人の「来む」と言ひて来ざりければ、またの夜、月の明かりけるにつかはしける、  
てふらなる月もながめじもさなきにようべ来ぬこそしこらつられ

これも東人のまねにや。(第二三話)

というもので、『万葉集』の東歌以来というか、『伊勢物語』第四段の「なかなか恋に死なずは」、「夜も明けばきつにはめなで」の歌以来、とりわけ東人は「歌さへひなび」ているものとされていたらしい。『源氏物語』明石巻の「あやしき海人どもなどの：聞きも知りたまはぬことど

もをさへづりあへるも、いとめづらかなれど」とある、

「海人のさへづり」に象徴される身分・職業にかかわる言語による意志の疎通の困難さや、『千載集』恋一・藤原公任「おぼつかなるまの島の人なれやわが言の葉を知らぬがほなる」のごとき通訳を必要とする新羅人との会話の不可能性にくらべればましなのかもしれないが、むしろ和歌の髄脳の次元でいうと、そこには、東人のように和歌の用語について二重三重に逸脱してはならないという認識と教訓が語られているのであろう。

第二〇〜二四話はゆるやかながら東国話の集成であり、第二七〜二八話も連想でつながっていたが、上巻の末尾の排列については、第四〇〜四一話が地方の話で、これで終わっていたものか、第一話・大斎院の事と呼応させて第二二〜四三話で締め括ろうとしたところ、新たに辺地の話を見いだしたものか、どうなっているのだろうか。大斎院の話を除けば、バラエティに富んだ地方話が並ぶことになるのであるが、それはともかく、最末尾の三話は大隅国、唐土、陸奥国が話題となり、子息敦敏を亡くした小野宮実頼の詠んだ歌「まだ知らぬ人もありけり東路に我も行きぞ過ぐべかりける」(第四六話)で閉じられる。唐土は西海道の延長線上にある外国で、もし異国の話で結ぶつもりはなかったのだとすれば、東国に対してはただ鄙と呼ぶのと

はまた違った意識を編者もつていたため、このような排列になったのかもしれない。ここまで東国話のうち三話まで見てきた。

#### 四 伯の母の事

次に、常陸の豪族常陸大掾氏のかかわる第二〇話「伯の母の事」を読んでいくことにする。梗概は次のようになる。

① 多氣の大夫、越前の守の逆修を聴聞の折、御簾の内に美女を見いだし、大姫御前と知り、乳母を語らい盗み出して、常陸に伴う。

② 乳母が文をよこし、文通が始まり、伯の母が「匂ひきや」と詠み贈ると、姉が「吹き返す」と返歌。

③ 後年、伯の母は常陸の守の妻となつて下り、姉の遺児の女二人と対面。女たち、伯の母が亡き母に似ると感涙。任期中、守の縁故に頼らず。

④ 任終の折、女たちはそれぞれ名馬十疋、皮箆を百疋の馬に負わせて餞別。常陸の守、豪勢なことに驚く。

⑤ 伊勢大輔の子孫には幸い人が多いが、「大姫君の、かく田舎人になられたりける、あはれに心憂くこそ」。

この話については、ほとんど史実と見て、現地踏査もふまえて常陸大掾氏の勢力を扶植していくさまをたどる石井進『中世武士団』（前掲。一三八頁以下）があり、福田豊

彦『東国の兵乱とものふたち』（吉川弘文館、平成7年）と読み併せることにより、平将門の乱（九三五〜四〇）、平忠常の乱（二〇二八〜三一）、前九年合戦（一〇五一〜六二）、後三年合戦（一〇八三〜八七）と兵乱のたびごとに武士団の形成されていく段階が浮かび上がってくる。

さらに、安倍氏・清原氏の跡を襲った奥州藤原氏の栄華もこの兵乱の流れと無縁でなく、高橋富雄『奥州藤原氏四代』（人物叢書、吉川弘文館、昭和33年）、入間田宣夫『都市平泉の遺産』（日本史リブレット、山川出版社、平成15年）なども参照されたい。

常陸大掾氏の系図は平貞盛の甥で養子となった維幹（〜九九九〜一〇二八）以下、為幹（〜一〇二〇〜）・重幹（〜一一〇六〜）・致幹（〜一〇五一〜）・直幹・義幹（〜一一七六〜）となり、貴族の漢文日記や軍記の類に彼等の名を点々と拾うことができるもの、おそらく系図には誤脱があるようで、うまく生存年代が繋がらない。多氣大夫を称したのは維幹であるが、伯の母が常陸に下向したのは、森本元子「康資王母と常陸介基房」（『古典文学論考——枕草子・和歌・日記』新典社、平成元年）によれば康平四（一〇六一）年ごろのようであり、仮にこの話が史実であったとすれば、大姫君を盗む事件はだいたい一〇三〇〜四〇年ごろに起こっていなければならない。世代的には

致幹が若者でふさわしいが、なんともいえない。ほかにも、事件は一〇〇〇年ごろで、伊勢大輔の姉妹か従姉妹が盗み出され、伯の母はその娘か孫娘に対面したとか、解釈しなおす手だてもあるかもしれないが、史実性にはこだわらないほうがよさそうである。

伯の母の事の話をつイクションととらえるのが迫徹郎「伯母の話」の素材源」（『中古文学』第一二号、昭和48年11月）で、結論のみを要約すると、『左経記』寛仁四年（一〇二〇）年閏十二月二十六日条により知られる、平為幹が故常陸守惟通の妻を強姦した事件を反映し、『更級日記』に載る武蔵竹芝の伝説を利用した創作話とする。いずれも東国の話ということなので興味深いが一説として紹介しておくにとどめよう。

ここで関心のひかれるところは、①では(イ)なぜ「多氣の大夫」なのか、(ロ)御簾吹き上げる風により、女をかいま見て恋慕する、(ハ)乳母の一存が養い君の運命を左右する、(ニ)女を盗む、などで、(ロ)以下は話型ないし「モチーフ」をめぐる問題である。(イ)については『小右記』長保元（九九九）年十二月九日条に、多氣大夫を称した維幹にかかわり、「常陸介維幹朝臣、先年所申給、華山院御給爵位料不足料絹廿六疋、及維幹名簿等送之、以維幹可預栄爵者、維幹余僕也、進馬三疋毛付、以院判官代為元、令奉絹及維幹名簿

等」という記事がある。このことにより花山院と小野宮実資の周辺には、栄爵を望んだ維幹の富裕さが評判になったことであろう。

本話のテーマの中心というか問いかけが、都の女性が地方豪族の子の妻になることは幸せなのか否かというところにあつたとすれば、女を盗んで国に伴う男を「多氣の大夫」とすることは、話によりリアリティを増すわけで、それゆえ常陸大掾氏の実態について史実をさぐることは大きな意味があると思うのである。

(ロ)はかいま見の一類型で、代表例として、『今昔物語集』巻二〇第7話の金剛山の聖人が染殿の后を見て妄執にとりつかれ、紺青鬼となって犯す話、『俊頼髓脳』「芹摘みし」の朝清めする者が芹を食する后を見て恋した話がある。たまたま二話とも、賤しい身分の男が貴女に恋してしまうというもので、本話にも適用できよう。述べたいことは多いが、『今昔』には、女は法師を近づけてはいけないという教訓が付されており、その方面の話柄も少なくないことを申し添えておく。

(ハ)については次節でふれることにして、(ニ)女を盗む話を見ると、本話のように、地方の男が都人を連れ帰って妻にする話、前掲のように受領の子が都人を妻にして任国に伴う話があるほか、『大和物語』第一五五段の安積山説話の

ように、大納言のかしづく娘を内舎人が盗み出し、陸奥国に逃げた話もある。そうすると、なぜ常陸とか陸奥とか東国なのかということが、あらためて問われなければならぬであろう。

②では、この贈答歌が『後拾遺集』雑五・一一三三〜三四に入集しており、

東に侍りけるはらからのもとに、便りに付けてつ  
かはしける

源兼俊母

にほひきや都の花は東路にこちのかへしの風につけし  
は

返し

康資王母

吹きかへすこちのかへしは身にしみき都の花のしるべ  
と思ふに

とあって、まず伯の母が「匂ひきや」の歌でなく「吹き返す」の歌を詠んでいることが注目される。伯の母の母が「匂ひきや」の歌を東に詠み送り、常陸に下向している伯の母が「吹き返す」と返歌していて、一〇六一年以後数年間のどの時点かにおける事件性のない贈答と見られるため、おそらく伯の母の事の説話を創作した作者がこの贈答歌を利用したものと考えられている。そのとおりであろう。

③では、地方の者から都人への豪勢な饒別ということで、利仁將軍の芋粥の話が思い併される。④の説話作者の感想

「大姫君の、かく田舎人になられたりける、あはれに心憂くこそ」には、地方の豪族の富裕さに驚く眼をもちながら、誘拐され地方に骨を埋めた大姫御前の運命を悼んで締め括るところに、いかにも都人の抜け難い価値観が横たわっているようである。『更級日記』で父菅原孝標が常陸介に任官した折、娘に向かつて、「幼かりし時、東の国に率て下りてだに、心地もいささか悪しければ、これをやこの国に見捨ててまどはむとすらむと思ふ：今はまいて、おとなになりたるを率て下りて、わが命も知らず、京のうちにてさすらへむは例のこと、東の国、田舎人になりてまどはむ、いみじかるべし」と嘆いて、単身赴任したことが思い浮かんでくる。

## 五 曲殿の姫君の事

残る第二八話「曲殿の姫君の事」は、次のような話である。

① 古風な兵部大輔夫妻、娘の将来を案じる。乳母を信頼せず。

② 両親没す。困窮した乳母、兄の法師を通じて言い寄る某前司の御子を通わすよう勧め、手引きする。

③ 某前司、陸奥国守に任官し、気弱な男君は姫君を京にとどめて、父の供に行く。

④ 父の任終の年に、男君、常陸守の婿になり、計七、八年東国に滞在する。

⑤ 男君、上京して姫君の家を尋ね、侍女の若狭から、乳母夫婦が二年後に亡くなり、若狭も娘夫婦の縁で但馬に行っていたと聞く。

⑥ 男君、京中を捜し回り、朱雀門の曲殿で零落した姫君を見出し、看取り、愛宕に行き法師になる。

話型やモチーフに注目するならば、①②では信用できない乳母、乳母の一存、③では気弱な男、再会談における離別、④では国司の婿、⑤では姫君の旧居を訪れる男君、⑥では男君の探索・再会、⑥では姫君の零落、悲恋遁世などが挙げられようか。まず身寄りのない姫君にはほかに、『うつほ物語』俊蔭巻の俊蔭女、『源氏物語』末摘花巻の末摘花、『狭衣物語』巻一の飛鳥井の女君、また『今昔物語集』巻一六第9話の、清水観音に祈り陸奥守の子の妻となった女などがいる。

乳母の一存の例としては、『狭衣物語』巻一の飛鳥井の女君の乳母は、大弐の息子道成が任国に下る時を待って、あざむいて女君を連れ出しており、『古本説話集』の「伯母の事」の大姫君の乳母は多氣の大夫に買収され、大姫君に同道して常陸国に行く。「曲殿の姫君の事」の乳母は

姫君のもとに受領の子を導き入れたのだった。買収されたり、姫君を養えなくなったりして、よかれかしくと独断で婿を定めているが、また姫君を見捨てたわけでもなさそうで、いくら利己・保身の振る舞いであったとしても、養い君と運命をとにもするのが乳母だったのである。

まだ親がかりのため気弱な男の例としては、『伊勢物語』第四〇段の「さかしらする親」に仲を裂かれた「心いきほひ無」い男の「すけるもの思ひ」の話、『平中物語』第三六段の「檜の木のならぶ門」を目印に女性と再会しながらそれで終わってしまった「あやしく親に従へる人」の恋があり、作り物語では相思相愛の女性がいながら、親同士の縁談に応じる『しのびね』ほかがある。

男女の仲が一時途絶える再会談には、『うつほ物語』俊蔭巻の若小君物語のモデルとなった『今昔物語集』巻二二第7話の藤原高藤と宇治の大領宮道弥益の娘の話はハッピー・エンドで、『源氏物語』蓬生巻の末摘花の苦難の話に受け継がれ、『大和物語』第一四八段の芦刈伝説は女が出世し男が没落する話である。『伊勢物語』第六〇段、第二段の夫のもとを去る話もある。女の零落を語るものに、『伊勢物語』第六〇段、第六二段のほか、第六二段の類話で事情の入り組んだ『今昔物語集』巻三〇第4話がある。中務大輔の娘は親の死後、夫の兵衛佐は人の聲となり、京



に長宿直した郡司の子が通い出し、やがて国に伴ったところ、本妻の嫉妬に遭い、親の郡司に使われる。国守が逗留し召して話を聞くうち、旧妻と知ることになり、女は恥じて死ぬ、という筋である。『源氏物語』蓬生巻の末摘花もよく描かれている。

陸奥国が舞台になるという点では、『大和物語』第五八段の平兼盛が源重之の娘に求婚したが、娘は異男して上京したという話も参照される。ここで本来なら、「伯の母の事」「曲殿の姫君の事」を通して、常陸国、陸奥国ないし東国をめぐる問題を抽出し、考察すべきところであるが、今回は勘弁していただきたい。

## 六 散逸物語の東国

最後に、物語史を考えるうえで、つと活用されてよい散逸物語において、東国がどのような像を結んでいるか、簡単にみていくことにする。『風葉和歌集』（一二七一成）に所載のものが五篇あって、まず『朝倉』（『風葉集』に二〇首ほか）であるが、題号は、『夫木和歌抄』所引『古今和歌六帖』歌「昔見し人をぞいまはよそに聞く朝倉山の雲居はるかに」により、作者は『更級日記』の藤原定家筆の仮名奥書きにより菅原孝標女と見られるので、一一世紀中ごろの成立であろう。その一首の詞書きに、

陸奥国に下らむとて、粟津といふ所にとどまりて  
侍りけるに、湖のおもてに月のいみじう明かきを見ても、思ひ出づること多くて

朝倉の皇太后宮大納言

知らじかし関より遠にかけ離れ見し有明の月を恋ふとは  
(羈旅・五七三)

とあって、女主人公が陸奥国に下向しようとしたことが知られるものの、その理由も、また実際に行き着いたのかどうかも不明である。

次に、『あづま』（二首）は、東国の武士が上京し、高貴な女性にかなわぬ恋をして、出家する話であろうか、

身より余れる人をほのかに見てよめる

あづまのもののおふ

かくまでは思はざりけむいにしへの芹摘みわびし人の心も  
(恋一・七七九)

かしらおろさむとて出でけるに、柱に書き付けける  
あづまのもののおふ

限りぞと思ひ入りぬる山路にも月や変はらぬ友となるべき  
(雑二・一二六八)

とある。『恨み知らぬ』（一首）は、題号は建仁元（一二〇一）年八月三日の「和歌所影供歌合」の「初秋曉露」題の三番右・寂蓮「きぬぎぬの恨みは知らぬ袂まで露をばつゆ

と秋は来にけり」(六六) が関係あろうか。

金の使ひにて、陸奥国へ下りて上りけるに、かし  
こなる女に 恨み知らぬの所の衆

花かつみかつみてだにも恋しきに安積の沼をいかで行  
かまし (離別・五六八)

この「金の使ひ」は、『今昔物語集』巻二〇第10話「陽成院の御代に瀧口、金の使ひに行く語」という、信濃国の郡司に妖術を習う話に登場し、また『大和物語』第七〇段にも天慶三(九四〇)年の平将門の乱に、藤原忠文が征東將軍として下向した折、童名を大七といった子息も「かうぶりして、藏人所にをりて、金の使ひかけて、やがて親のともによく」途中、亡くなる哀話がある。一〇世紀半ばごろの例があり、藏人所ないし瀧口の者が任ぜられており、調達する必要に応じて派遣されたのだろうか。鎌倉幕府の成立によって「金の使ひ」に変化が生じたのかどうかは不明ながら、今のところ物語の成立を鎌倉初・中期と考えておきたい。

『野島』(六プラス存疑二首)は、題号は『千載集』雑  
跡・旋頭歌・藤原顕輔・一一六六「あづま路の野島が崎の  
浜風に我が紐ゆひし妹が顔のみおもかげに見ゆ」による。  
ただし、顕輔詠には本歌があつて、『万葉集』巻三・二五  
一「淡路の野島が崎の浜風に妹が結びし紐吹きかへす」に

よつていよう。また、『五代集歌枕』は淡路国、『八雲御抄』は近江国、淡路国とするものの、物語の舞台は安房国と思われる。ここでは粗筋の復原をめざすことはしないが、いくつの特微的な歌を取り上げると、

幼き娘を都に置きて、あづまへ下り侍りけるによ  
める よみ人知らず野島

思はずなまだ二葉なる姫小松引き別れ行く嘆きせんと  
は (離別・五二五)

から、幼い娘を京にのこして母が東国(野島か相模国か不明)に下つており、

野島にまかりて、月待ち出でたる折しも、鹿の鳴  
きけるに、思ひ出づること侍りければよめる

面影を波より出づる月に見てあかぬ名残を牡鹿鳴くな  
り 野島の三位中将  
(羈旅・五八二)

あづまに侍りけるころ、相模なりける女のもとに  
尋ねまかりて 野島の三位中将

見せばやな野原篠原尋ね来て逢はぬ恨みにぬるる袂を  
(恋二・八五七)

から、三位中将が主人公で、野島に下向し、浦賀水道を渡つて相模国の女のもとを訪ねている。そもそも野島は歌枕としては淡路、ついで近江のそれが知られていたところに、

どういうきつかけから、わざわざ安房の野島崎を物語の舞台に選んだのか、作者にはどの程度東国について知識があったのか、興味は尽きない。物語の成立は院政期最末期か、鎌倉時代にはいつてからであろう。

『海人の藻塩火』（一四）は、題号は『後拾遺集』羈旅・花山院・五〇三「旅の空よはの煙とばかりなばあまの藻塩火たくかとや見ん」による。院の皇子が仁和寺の法親王のもとで出家、修行して大僧都にのぼる話で、「修行し侍りけるに、吹越といふ所の花おもしろかりければ」（春下・九九詞）、「紀伊の国に侍りける春の初めに：」（雑一・一一五七詞）とあるように、『大和物語』第二段で知られる宇多法皇、『大鏡』伊尹伝の花山院の山踏みの説話や、行尊（一〇五五―一三三五）の家集を想起させる内容である。

童にて心とどめたりける女の、「暗くて恐ろしきに、紙燭さして」といふと夢に見て、亡くなりけるにやとて、光明真言よみて、その印結びて思ひやるとてよめる

海人の藻塩火の大僧都

中空に漂ふ闇は深くとも光を交はせ山の端の月

（釈教・五二〇）

東の方修行し侍りけるに、頼義朝臣が攻めけむ衣川の館に、思ふ心ありて卒塔婆立てなどして

救はんと思ふ誓ひを立て置けばむべも仏の姿なりけり  
（釈教・五二一）

この五二一番歌は『海人の藻塩火』のものか、それとも物語名と作者を書き落としたものなのか、存疑というほかないのであるが、前者である可能性が比較的高いように思われる。詞書きの「頼義朝臣が攻めけん衣川の館」はいうまでもなく『陸奥話記』、『今昔物語集』巻二五第13話「源頼義朝臣、安陪貞任等を罰つ語」、『古今著聞集』巻九・武勇第一二・336「源義家衣川にて安倍貞任と連歌の事」などで知られる話であった。

かつてこの物語の成立を、法親王の初例（二〇九九）、亡者得脱のため仁和寺僧が光明真言法を修した始発（二一〇七）などから、一二世紀初めの一一二〇年前後の可能性のほうが大きいのではないかとしたが、明恵上人高弁が在家の人々のために光明真言土沙加持を広めたこと（一一二二―八ごろ）、源義経が衣川の館で兄頼朝の軍に討たれたこと（一一八九）との間に関連がないと言いつ切るまでの自信はない。今後なお考えてゆきたい。